

Moodle システムを併用した英語授業実践報告

A Report of English Classes Using Moodle System

梅田礼子

Reiko UMEDA

(和歌山大学クロスカル教育機構教養・協働教育部門)

Abstract

This paper presents an overview of the online and face-to-face English classes which the author conducted in the 2021 academic year, with a special mention to online quizzes during face-to-face classes and peer review on presentations. It shows advantages of online quizzes and peer review on presentations. It suggests using online teaching technology even after this virus pandemic, as it provides learning environment for students who need review and who have mental issues and have difficulties studying in face-to-face classes.

キーワード/Keywords: オンライン授業/学習、Moodle、オンライン小テスト、ピアレビュー、ポスト・コロナの教育、教育改革

Online Teaching/Learning, Moodle, online quizzes, peer review, Education after COVID-19, Education Reform

1. はじめに

2020年度は新型コロナウイルスが世界中に蔓延し、比較的感染者数が少なかった日本においても、生活や大学を含め学校教育に多大な影響が出た。簡単に2020年度当初を振り返ると、以下のような経緯であった。2020年2月27日 政府の「休校要請」(3月2日から全国すべての小中学校、高等学校、特別支援学校の休校要請)、3月24日 文部科学省「令和2年度における大学等の授業の開始等について(通知)」、4月7日 政府「緊急事態宣言」(7都県対象)、4月16日 政府「緊急事態宣言」全都道府県対象。5月24日 全面解除。

これらを受け、多くの学校が授業休止や、卒業式・入学式・学校祭等、学校行事の規模を縮小したり中止したりした。大学においても、多くの学校が前期開講を遅らせる、オンラインをメインとした授業へ切り替える、といった対応に追われた。大学では小中学校に比べて学生のパソコン保有率が高く、ハード面では比較的スムーズにオンライン授業に対応できたようである。筆者が勤務する和歌山大学でも2020年度はほぼオンライン授業となった。

2021年度は大学によって、前期から対面授業を再開、後期から再開、また、前期から一部の実験・実技を伴う授業のみ対面再開、など、様々な対応だったようである。

和歌山大学では前期途中からと後期、原則として対面授業を行った。筆者は Moodle (2020

年度に着任して初めて使用法を学習)も併用した授業を行った。本稿では Moodle を併用した授業、特に、小テストを Moodle 上で行った点、プレゼンテーションのピアレビューを Moodle 上で行わせた点、について簡単に報告する。また、オンライン授業から対面授業への転換という特殊な時期の記録として、転換期に少し見られた混乱も報告する。

また、2020 年度のオンライン授業、2021 年度のオンライン授業から対面授業への移行という経験を機に、今後の教育についても考察する。

2. 授業実施状況

2-1. 和歌山大学の状況

和歌山大学では 2020 年度は前後期ともに主に原則としてオンライン授業を行って対応した。前期は緊急事態宣言発出のため開講が 5 月 7 日(木)と遅れた分を、授業時間を 1 回 90 分から 105 分とすることで、授業時間を確保した。(対応状況の詳細は梅田 (2021)。)

2021 年度については、前期は大阪に緊急事態宣言が発令されたことを受け、4 月 26 日(月)から第 1 クォーター期間が終了する 6 月 10 日(木)(6 月 12 日の予備日を含む)まで、対面授業をオンライン授業に切り替え、宣言解除後対面授業再開、後期は原則として対面授業であった。

学生への周知について、大学 HP と教育サポートシステムのアナウンス(学生の大学アドレスメールに自動配信される)の二系統あったこと、周知の方法・文面から、学生側に少し混乱が生じたようであった。具体的には一部の学生が、対面再開と知らずにしばらくオンライン受講を続けていた。少し長くなるが、今後ウィルスの再発や、地震等災害によって急にオンライン授業対応を迫られることも考えられるので、詳細に振り返り記録しておきたい。

学生への周知方法は以下のようであった。

1. 4 月 22 日：大学 HP トップのお知らせ：理事(教学担当)より

「緊急事態宣言発令に伴う遠隔授業への切替えの予告について(通知)

今般、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言発令に伴い、4 月 26 日(月)から第 1 クォーター期間が終了する 6 月 10 日(木)(6 月 12 日の予備日を含む)まで、対面授業を遠隔授業に切り替えます。」

これに加えて、教育サポートシステムから同内容が学生に大学学生メールアドレス宛で送信されたと思われる。(現在、過去の連絡が確認できないが、筆者が 8 月 22 日に、周知による学生の混乱を上司に報告したメールにそのような記載があった。)

2. 6 月 3 日大学 HP トップのお知らせ：理事(教学担当)より

「緊急事態宣言期間の延長に伴う本学の対応について(通知)

今般、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言期間の延長に伴い、同期間中の登学禁止および遠隔による授業を継続します。ただし、第 2 クォーターからは、実験・実習などで学部長・研究科長等が必要と認めるものについては、対面での授業を実施します。(中略)

授業実施方法等については教育サポートシステムにより指示がありますので、各自確認の上、受講してください。」

3. 2021 年 6 月 16 日、宣言解除見込みに伴う連絡：大学 HP 理事(教学担当)より

「緊急事態宣言解除後における本学の対応について（通知）」

新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言が解除される見込みとなっています。

緊急事態宣言が解除された場合は、6月21日より対面授業を再開し、年度当初に予定の授業形態に戻します。

直ちに対面授業への切替えができない科目は、解除日より2週間を目途に対面授業へ切替えていく予定です。その場合の詳細については、担当教員より教育サポートシステムや Moodle など通知がありますので、各自確認のうえ、受講してください。」

この3.の通知にある「宣言解除に伴い対面授業に戻る」ということを知らずに、対面授業に戻った期間中も自宅で授業資料により自習していた学生が複数名あった。筆者は3.の大学から学生への通知は「6月21日より、デフォルトは対面授業、引き続きオンライン授業を行う授業は担当教員から連絡がある」という周知なので、学生は分かっているものと思い、自分の授業の学生に重ねての周知はしなかった。

筆者は対面授業でも復習用に授業資料を Moodle に載せている、小テストも Moodle を利用しているので、Moodle 上の見た目では対面に戻ったと気付きにくかったようである。

対面に戻った初回にあまりにも欠席が多かった1年生クラス（45名程度中10数名）については、1年生でまだ大学HPをチェックすることが定着していないのだろうと思い、Moodle上の授業回日付のところに「今回より対面授業、(教室名)」と記載した。それを見て、翌週から来た学生もあったが、学習習慣のない学生は Moodle を見ていないようで、それにも気づかずしばらく休んでいた学生もいた。最終回も休んでいて、友人とメールなどして気が付いて筆者に連絡してきた学生も2名、1年生だけでなく、4年生も1名あり、こちらも驚いた。

緊急事態宣言期間が終わりに近づいた時点で、自分で情報収集しようとする学生に非があり、大学はHPで連絡しているのに、大学に非はない。しかし、学生側としては、オンライン授業になるという通知1.がメールで来たので、対面授業に戻るなら大学からメール連絡が来る、と思い込んでいたようである。対面授業に戻ることに、周知方法が統一されていなかったために生じた混乱かと思う。

また、教育サポートシステムに掲載される大学から学生への連絡は、学生の大学アドレスメールに届くようになっているが、これを見ない学生もいるようだ。自分のスマホに転送しておくこともできるはずだが、していない学生もいるらしい。「面倒」「知らなかった」の他、大学からの連絡が、授業に関する重大連絡の他に、通常のイベントなども連絡が来るようで、多くて煩わしいと思う学生は転送しないそうだ。

大学・教員側としては、大学HP、教育サポートシステム（およびそこからの学生宛てメール）が周知手段であり、そこで責任を果たしているが、一部の学生が見ないという問題は残ってしまう。学生への習慣づけを促したい。

2-2. 授業実施概要

筆者が担当した科目は、以下の通り。

2020年度和歌山大学:前期英語総合科目3、TOEIC対策授業1、後期:英語総合科目2、TOEIC対策授業1、非常勤:三重大学教育学部後期音声学1

2021年度和歌山大学:前期英語総合科目4、TOEIC対策授業1、後期:英語総合科目3、TOEIC

対策授業 2

2020年度は前・後期とも、和歌山大学の授業では、MoodleにPower Pointファイル（以下PPT）を掲載するオンデマンド型で行った。PPTには極力、音声・ビデオで解説を入れた。特に総合科目で会話練習を含む授業では、受講者が画面に映る筆者と会話できるよう、応答する間も入れて動画を作成してPPTに入れた。会話練習もあるので、Zoomや、大学が利用しているTeamsといったテレビ会議システムを用いて同時双方向型授業を行えばよかったのだろうが、2020年4月に着任したばかりで、Moodleの使用法学習や教材研究から行わねばならない状況で、さらに新たにシステムの使い方を学習する時間はなく、その選択はしなかった。

（授業資料作成の詳細や、学生の通信学習での孤独感・不安を和らげる工夫などについては梅田（2021））

総合科目について、対面授業であれば、学期末にプレゼンテーションを行ってもらう予定だった。Moodle上「フォーラム機能」でプレゼンを投稿してもらい、他の学生のプレゼンを見てコメントを投稿する「ピアレビュー」形式を後期は行った。前期は筆者がフォーラム機能の学習を十分に行う時間が取れず、成績評価に関わることであり、万が一うまく行かなかった場合を懸念し、英作文課題に変更した。

後期に非常勤講師として担当した三重大学「音声学」はZoomで行った。その際にZoomの使用法を指導していただいたので、スムーズに対応できた。また、それを生かし、2021年度前期の和歌山大学での授業の一部をZoom利用によるリアルタイムオンライン型で行った。

2021年度は前期初期と後期の断水期間中を除き、対面授業を行った。PPT資料は元々授業で提示用に使用する予定で、少し修正して使用した。また、学生の復習の便宜、欠席者の次週の便宜のため、MoodleにPPT資料を載せた。授業中手元で見るために利用していた学生も何名かあった。PPTの修正は主に、教室利用向けに文字を大きくする、音声解説が長いところは区切る（音声解説も復習・自習の便宜のため残しておいた）、音声解説の項目を音声マーク横に追加し、利用者の便宜を図る、であった。また、2020年度の筆者作成授業アンケート「改善してほしい点」に「PPTの音声のマークが重なっているところがあってずらさないと押せなくてすこし面倒でした」という意見があったので、その点も修正した。

2-3. 成績評価方法

筆者担当の授業の成績評価方法は主に、以下の通りである。

2020年度

- ・TOEIC対策科目：単位認定試験 40%，前回授業の復習小テスト 5点×12回 計 60点、60%
- ・総合科目：前期 その回の復習小テスト 5点×12回 60点（60%）、
英作文 5点×3回 15点、計 75点、英作文（プレゼン予定を変更） 20点（20%）、英作文や授業の感想（プレゼンピアレビュー予定を変更） 5点（5%）

後期：復習小テスト 5点×10回=50点（50%）、英作文課題 20点 1回=20点（20%）、
プレゼン作成 25点 1回=25点（25%）、ピアレビュー 5点（5%）

2021年度

- ・TOEIC対策科目：単位認定試験 65%，前回授業の復習小テスト（語彙、リスニング、文、読解等） 35%（5点×14回 計 70点÷2=35点換算）を総合的に判定

・総合科目：毎授業回にその回の復習小テスト 5点×12回 60点(60%)、英作文15点×1回 15点(15%)、プレゼンテーション課題提出と発表20点(20%)、ピアレビュー 5点(5%)を総合的に判定

2021年度は、2020年度に英作文課題の採点・添削・コメントに多大な労力・時間を要し*、学生への返却が遅くなってしまった反省から、英作文回数を少なくした。

* (3科目8回合計約250の英作文。1人当たり20分として約83時間、30分として約125時間。詳細は梅田(2021)) また、総合科目で、2020年度は英作文・プレゼンの回数や点数が科目によって異なっていて、周知や採点の際に紛らわしく感じたので、2021年度は3つの授業で共通とした。

2-4. 小テスト

2020年度はオンライン授業であり、小テストはMoodle上で行った。2021年度も、Moodleでの小テストのメリットが大きいため、対面授業の際にも、小テストはMoodleに設置し、約10日の締め切りを設け、受験しておくようにという方法を取った。

2-4-1. Moodleによる小テスト(自動採点)のメリット・デメリット

従来の紙での小テストと、Moodleシステムでの小テストのメリット・デメリットの主なものは以下の通りである(詳細は梅田(2021))。

【紙】メリット

学生にとって：インターネットに繋がなくても、受験・復習可能。

教員にとって：作成がMoodleの小テストよりは短時間でできる(印刷機器等設備にもよる)。

デメリット

学生にとって：返却が翌週以降となるため、文法や語彙を誤って覚えてしまった場合、その発見・修正が遅れる。

教師にとって：作成に手間がかかる(原稿作成、印刷、用紙裁断)

- ・採点・記録・必要ならコメント記入、に時間がかかる。
- ・欠席者に備え、毎回過去の問題も持ち歩く手間・重い。
- ・欠席時の追試験受験管理の労力がかかる。成績評価の一部なので、神経がすり減る。

【Moodle】メリット

学生にとって：・正誤が即時分かるので、間違いにすぐ気づき、覚え直しができる。

・すぐに点数が分かり、弱点を把握しやすい。学期末試験の対策がしやすい。

・追試を空き時間に、自宅等で受けることができる。(授業後に残って受けたり、教員研究室に向いて受けたりする必要がない。)

教員にとって：・採点・記録に時間がかからない。・学生の覚え間違いや弱点を把握しやすい。・追試を学生に随時受けさせることができる。・締め切りを設けることもできる。・教室に毎回増える過去問題を運び続ける必要がない。

デメリット

学生にとって：(対面授業で、小テストをMoodleで授業内に受ける場合、デバイスを持参する必要がある。)

教師にとって：作成に時間がかかる。（簡単な空所補充の問題でも、3問で1時間程度。初期は Moodle 小テスト機能の使い方学習をしながらで、数時間かかった。）

このように、オンライン小テストは、少々のデメリットはあるものの、採点が即時・自動でされるというメリットが大きいため、対面授業においても利用した。

2-4-2. Moodleによる小テスト（自動採点）を利用したうえでの問題点と良かった点

問題点1. 締切日を10日程度後の20時としたのは、次回授業がある日に小テストの受け忘れに気が付いても、間に合うようにという配慮だった。しかし、それでも受け忘れる学生がクラスによっては3~6名程度出た。体調不良だけでなく、単純な受け忘れもあるが、総合科目では特に成績評価における小テストの割合が高いため、数度、数回分まとめて締め切りを延長し、それを学生に Moodle 上と授業で周知、それでも受けていない場合には Moodle メッセージで受験を呼び掛けた。

授業内で行うのではなく、授業外に各自受験するよという方式であったため、受け忘れる学生が出たようである。授業担当者に度々の締め切り延長・周知・管理という手間・労力がかかった。授業内で行わなかったのは、学生に毎回デバイスを持参させるのを避ける、授業時間が削られることを避ける、という理由であったが、デバイスについては携帯電話でも受験可能で、携帯電話ならほとんどの学生が毎日持参しているので、学生の負担は少ないだろう。時間については、習慣が定着すれば、5分もかからないだろう。（ただし、授業初めに行う場合、遅刻者をどうするかという問題はあある。）

問題点2. オンライン授業の時と同じだが、「各自受験しておく」という方式のため、カンニングや教え合いのチェックはできない。また、していない。信頼ベースで行うしかないだろう。

良かった点：2-4-1に挙げたメリットの中でも、特に、正誤が即時分かるので、学生が間違いにすぐ気づき、覚え直しや復習ができる。教員にとっても学生の覚え間違いや弱点を把握しやすい、という点は大きい。多くの学生が間違えていたことは授業内で解説し直すことができた。

このように、多少の問題点はあるが、メリットが大きいため、2022年度は受け忘れを防ぐため・カンニング防止のため、授業内で行うことを試行する。（ただし、公欠や体調不良による欠席の場合の受験をどのように行わせるか、の問題はあり、検討中。）

2-5. 「フォーラム機能」を利用したピアレビュー課題のメリット

総合英語科目では、「フォーラム機能」でプレゼンを投稿する、また、他受講生のプレゼンにコメントをすることを課題の1つとした。他受講生の旅行体験やクラブ活動体験、お勧めの趣味や観光地、食べ物などを知ることができる、他受講生の英作文力や英語の発音を知ることができる、という点で興味を持って取り組んだ学生が多かった。ピアレビューの採点としては、各自がどれか1作品につける1回、であったが、複数作品にコメントをした学生も多くいた。他の受講生の発音の良さや、作られた文の正確さなどに刺激を受けたというコメントが多く見られた。

また、対面授業でプレゼンを行わせる場合は、受講人数が多いと時間がかかる、長くなると聴く側の集中力が弱まる、用紙を配布して感想を集め、それを教員が点検した後で発表者に渡す（あるいは、教員側で整理してタイプして渡す）、という手間がかかる、などの問題があるが、Moodle

フォーラム機能で、ピアレビューは各自随時しておくこと、とすることで、これらの問題がすべて解決した。学生側としても、都合の良い時間に面白そうな作品や友人の作品を選んで視聴できるので、意欲・集中力が保たれたようである。

また、前期途中までオンライン授業、後期対面で再開もすぐに断水の影響でまた2日間の休校および一週間程オンライン授業となり、十分に友人・クラスメートとの交流ができていない中で、他受講生と交流できる良い機会ともなった。

2-6. 学生の学習状況

脱落（アクセス・参加が数回のみ、または途中から無し）、放棄者（アクセス・参加無し）が各クラス1～4名程度出た。学習履歴を確認し、アクセス・参加が無い・少ない学生にはMoodleのメッセージで呼びかけを行った。一部復帰した学生はあったが、放棄者は復帰せず。

試験対策授業では授業外にしっかり復習して小テストに臨む学生が多かったようで、小テストで高得点が多かった。総合英語科目では、実際に英語を使う訓練を中心にしており、予習は必須としていない。復習も点検はしていない。

2021年度後期は筆者にとっても着任後初の対面授業であったが、学生の授業への集中度はおおむね良好であった。総合英語ではペアやグループで会話練習を行ったが、大半の学生が楽しそうに取り組んだ。一部、対人関係が苦手なのか、あまり参加しない学生もいた。

学習成果について、筆者は2020年度4月着任で、和歌山大学学生の英語力データを持っておらず、この課題の出来具合が元々の英語力によるものなのか、授業を通じて獲得した力によるものか、は判断ができない。しかしながら、英作文、プレゼンは力作、優秀作が多かった。多少ケアレスミスは見られたが、基本的な語彙・文法事項はすでに身につけていた。語彙選択のミスや、態、時制、相のミスなどが時々見られた。

「総合」の授業は、新しい語彙や文法項目を習得するより、すでに獲得している知識を使って、英語を「発信」することに重点を置いたもので、「以前より話すことに抵抗が無くなった」「思うことをうまく話せないのもっと勉強しようと思った」といった感想が得られた。

「TOEIC対策授業」では、「新たに学んだこと」「授業を受けて調べたこと」を書くミニレポート課題があり、それによると、「高校までの既習事項の整理や復習ができた」「リスニングを集中して学習し、少し聴きとれるようになってきた感じがする、自信がついた」という、一般英語に関する感想と、「拾い読みをする」「リスニングもまず大まかな内容把握をする」など、試験対策・受験テクニックを新たに学んだ、という感想があった。

2-7. 学生からの評価

2021年度前期は自作の授業評価アンケートをMoodleに設置した。金1英語I（総合）クラスはアンケートを設置したが、公開をし忘れたため、無し。後期は多忙のため、そのアンケートの設置が間に合わず。

全般的に、テキストや説明難易度、授業での量、進度、説明の量などに不満はなく、おおむね好評であった。それらの詳細は割愛し、主に自由記述を以下に記載する。

(1) 前期

水3総合英語（回答数14） オンライン授業の際はZoomを使用したリアルタイム授業。ビデオ顔出しは任意としたため、顔出しをする学生はいなかった。

・授業内容はとても面白くて、日本と外国の文化の違いや、先生の体験談なども聞けて楽しかったです。ただ、授業中の一部の人の私語が気になりました。コミュニケーションを大切にする授業なので、話さなければならない時に積極的に話すのはいいのですが、先生が話している途中に私語するのは控えて欲しいなと感じました。

・オンラインリアルタイム授業でのグループディスカッションの時、活動に参加してくれない（できない？）学生がいて取り組みにくかった。対面ではしっかり取り組めることができた。

- ・zoom は任意ではなく、顔出し絶対など、統一をしてほしかった。
- ・遠隔授業は、顔出しを強制されないで良かったと思う。プレゼン課題についても様々なバリエーションのある課題でそれぞれ個性のある作品になってよかったと思う。
- ・後期も梅田礼子さんの授業がいいです。
- ・COVID-19 の 19 は 2019 年からきているそうです。グループディスカッションもあり、楽しい授業でした。リスニングの際、スピーカーの調子が悪いなら他のデバイスで対応することなど出来なかったのかとは思いました。

・前期、ありがとうございました。（同様 2 名）

木 2 TOEIC 対策（回答数 15）オンライン授業の際は PPT 資料でのオンデマンド型。選択式問でオンデマンド型については「パワポ資料である程度学習はできたが、双方向で学習できればさらによかった 20%、パワポ資料でも十分学習ができた 67%」であった。自由記述は以下 3 名。

- ・視聴は遅れましたが、小テスト受験は間に合っていました。むしろ、自分のペースで視聴できるので、無理なく学習できてよかったです。
- ・毎回授業のパワーポイントを上げてくださることで、復習がしやすかった。
- ・TOEIC 対策がしっかりできてよかった

金 3 総合英語：（回答数 4） オンライン授業の際は PPT 資料でのオンデマンド型。選択式問でオンデマンド型については「パワポ資料である程度学習はできたが、双方向で練習をできればさらによかった 25% パワポ資料でも十分自習、練習ができた 75%」、自由記述なし。

金 4 総合英語：

- ・先生のボードを使った説明はよかったので続けてほしい。

（2）後期

課題採点に追われ、自作アンケートを Moodle に設置する時間が取れず。大学が設置したアンケートは回答者が 0~7 名と少なく、データとして利用しにくい。授業の難易度、教材、教員の説明、速度、満足などおおむね良好であった。特に自由記述があったのは次の 2 つ。

月 2（新規担当） 経済学部 総合初級（テキスト：American English File starter） ・英単語の発音を学ぶことができた

木 2 TOEIC 対策 システム工学部 ・体調不良による都合にも直ぐに対処してくださって、非常に助かった。常に学生のことを思っていてくれるのが伝わるので、好印象だった。

その他、特に総合英語科目で、授業前後に受講生と話していた中で、「英語は苦手で、英語の授業はあまり好きでないが、この授業は英語を使う練習で、楽しく受けられた」「これまで

受けた英語授業の中で一番楽しい授業だった」という感想も得られた。

また、英作文・プレゼンで「対面授業とオンライン授業どちらが良いか」というテーマを選んだ学生5名ほどのうち、4名は「自分のペースで学習できる」「一方通行の講義であればオンラインで十分」「通学の時間と労力がかからない」などの利点を挙げて「オンライン授業を好む」という結論で作成していた。(このような二項対立のテーマの場合、両方のメリット・デメリットを述べるのではなく、ディベート式に、どちらか片方に意見を固めて書く、という指示であったので、極端になった可能性はあるが。)

3. オンライン授業やオンラインを併用した授業の利点

3-1. ピアレビューやディスカッションをさせることができる

2-5節で述べたように、対面授業でも Moodle システムの「フォーラム機能」を併用することで、対面授業で行うよりも効率よく、ピアレビューを行わせることができた。また、学生にも好評であった。

3-2. 復習しやすい

コロナ禍でやむなく一気に始まったオンライン授業であったが、メリットとして、平井(2020)は学校休業中のオンラインの学びで「教育現場に学び方と学ぶ場所という二つの多様な学びの姿を示した」と指摘している。要約させていただくと、「学び方」の多様性として、「学ぶ内容に応じて適切な学び方を選ぶ：技能中心→ドリルが有効、知識・理解中心→オンデマンド教材が有効、AIを活用したドリルであれば、個別に適切な課題が提供されるという個別最適化が図れる」ことと、「同期型オンライン授業では探求型の学びの実践が見られた。(中略)オンラインの学びに取り組むことにより、授業自体が学習者主体の授業に変容していったと言える」と述べている(平井(2020:112))。

実際、筆者の授業では、授業資料 PPT を Moodle に掲載したので、学生にとって復習が行いやすかったようである。再利用が可能となる利点を生かし、「反復学習」の仕組みが作りやすい。北尾(2020:48-57)では「分散的な反復学習が知識を精緻化する」ことを示し、「効果的な反復学習で学びを深める」システムを提供することを勧めている。

3-3. 対人関係が苦手な学習者に対応しやすい

また、「学ぶ場所」について、平井(2020)は「多くの自治体において、教室での対面授業に参加できない児童・生徒がオンラインでは参加できたという成果が見られた」(対人関係が苦手な児童・生徒が参加しやすかった)平井(2020:111)と指摘している。また、学ぶ場所の多様性により、今後の取り組みとして熊本市の例「短期の欠席には教室の授業をライブ配信、長期の欠席・不登校にはオンライン専用の教育課程で対応」を挙げている。平井(2020:113)。

筆者担当の授業でも、2021年度、対人関係が苦手、大学になじめないままの2年生(入学が2020年度で、友人作りがあまりできていないのも一因と考えられる)が、大勢の人の中で授業を受けることが、精神的に負担が大きいと連絡してきた。授業は欠席であったが、わざわざ登校し、授業が終わったときに直接告げに来た。大学での学生サポート制度はまだ利用していないということであったが、事情を話している様子から重症と思われたので、サポート制度・保健室相談窓口等の利用を勧めたうえで、授業については参加が苦痛な日にはオン

ラインオンデマンドでの学習でもよいとした。何とか学習を継続し、無事合格された。

大学においても、長期の欠席・不登校、そこからの退学、という問題は存在している。今後オンライン授業の経験を活かし、オンライン授業を併用した熊本市の例のような教育の在り方の検討も望まれる。

3-4. 授業に関する連絡がしやすい

対面授業でも Moodle システムを併用することで、小テスト実施の他にも、小テスト締め切りや課題内容、課題の締め切り等の連絡が行いやすかった。特に、課題内容や締め切りの概要をファイルで掲載しておけるので、学生が対面授業で配布したプリントをなくしても、いつでも参照することができる。もちろん、2-1.の対面授業再開連絡を学生が十分に把握していなかった問題と同様、授業内連絡も学生が Moodle 掲載内容をしっかり読まないとは把握できない、そもそも Moodle にアクセスしないと読むこともない、という問題はあるわけだが、教員側の連絡責任を果たすことができる。従来の対面授業のみの場合、(筆者が和歌山大学勤務前に勤めていた私立大学であったように) 成績に関わる小テストの受験や課題提出について、教員が文書を作成し、教務課に掲示板掲示をお願いしに行く、という労力と時間がかかっていた*。それが、Moodle システム併用で解消した。* (教育システムからメール連絡、という方法もあるが、当時はまだ、重要連絡については掲示板をメインとしていた。現在は変わっているかもしれない。)

3-5. 不測の事態に対応しやすい

2021 年度後期には、和歌山市で 10 月 3 日 (日) 水道橋崩落という事故があり、紀ノ川以北地域は断水、その影響で、和歌山大学では 10/5 (火)、10/6 (水) は休校日、10/7 (木) ~10/13 (水) はオンライン授業となった。休校した授業は、12/2 (木)、12/3 (金) の予備日が授業日となった。(なお、断水直後の 10/4 (月) は通常授業であった。大学で雨水利用の中水をトイレに使用しており、備蓄があり、1 日程度学生・教職員が登校しても大丈夫との判断だったようだ。ただ、事故の起きた 3 日には大学から教員・学生に連絡はなく、筆者は月曜授業クラスの学生に「現時点で大学から連絡がないので、明日は通常授業が行うと思われます」と連絡した。対応については 10/4 日に大学 HP で理事より、オンライン授業として対応する旨発表があった。「なお、10/14 (木) 以降の対応については、状況が分かり次第連絡します」という記載があったが、その後大学 HP で連絡はなかったようである。この際も、通常オンライン授業に戻った後も、知らずにオンライン受講していた学生が数名あった。)

このように、オンライン授業や、オンライン機能利用にもメリットがあった。

4. 今後 (ウィズ・コロナ、ポスト・コロナ) の教育について

3 章で述べたように、オンライン授業や、オンライン機能利用にもメリットがあった。教員が苦勞して使い方を学習したオンライン道具 (Moodle などのプラットフォーム, Zoom, Teams などの会議システムなど) は今後も、対面授業と併用することが可能で、有用であると考えられる。

2020 年度、2021 年度で全面オンライン授業と、対面授業+Moodle 利用の両方を行った経験

から、筆者は対面授業+Moodle利用が好ましい形と感じた。

もちろん、全面オンライン授業の際にもPPT資料に極力動画を入れるなど工夫をし、学生からは「オンラインでも支障なく学習できた」「都合の良い時間に学習できた」など、肯定的評価も得た。しかし、2021年度対面授業に戻ってみて（筆者にとっては和歌山大学で初めて行う対面授業であった）、やはり人との交流の大切さも実感した。

文部科学省は、大学等に対して2022年3月22日、「令和4年度の大学等における学修者本位の授業の実施と新型コロナウイルス感染症への対策の徹底等に係る留意事項について（周知）」（文部科学省高等教育局高等教育企画課）（以下、「留意事項」）を通知した。

2021年度中退者・休学者のうち「学生生活不適応・修学意欲低下」を理由とする者の割合が、昨年よりも増加傾向にあったこと、豊かな人間性・人格形成には人的交流が重要との考えから、感染対策を十分に講じたうえで対面授業に適切に取り組む等、学修者本位の教育活動や学生に寄り添った対応等を求めている。

「大学等における高等教育は、オンライン等を通じた遠隔授業の実施のみで全てが完結するものではなく、豊かな人間性を涵養し、人格の完成を目指す上では、直接の対面による学生同士や学生と教職員の間の人的な交流も重要な要素です。

こうした観点から、大学等における学修の充実を図るためには、多様な人々の関わる授業や、少人数のグループワークによる質の高い学修など、相互に切磋琢磨することのできる環境を整備することが重要であり、その土台として、学生の円滑なコミュニケーションを促していくことが求められます」（文部科学省2022年3月22日）

豊かな人間性・人格形成には人的交流が重要という指摘に賛同する。

一方で、溝上（2020:94）の指摘のように、オンライン学習を併用したブレンド型授業の可能性もある。学力の高い生徒について、「主体的に学べるならば例えば高校1年生が1年間で高校3年分の学習を終えることも可能である。場合によっては単位制や飛び級制度を利用し、通常より早く大学へ進学する可能となる」。（溝上（2020:93-95））そして、「学力が高い生徒にとっても低い生徒にとっても、与えられる学習環境の枠組みを多少なりとも自分で選択できるものにしていけるかどうかの多様性の問いである。多様性の力学はすさまじい個人差を生み出す。それを教育格差と捉えるのか、個の多様性の促進と捉えるのか、新たな社会的認識の課題も生まれてくる」（溝上（2020:96））と指摘している。

このように、コロナ禍で教育を行った経験から、今後は個別の「授業」だけでなく、大学としての「カリキュラム」、また「教育の在り方」の見直し、改善が期待される。

参考文献

- 赤沢早人（2020）カリキュラム・マネジメントで「教科書をこなす」発想を変える。「教育研修」編集部編『ポスト・コロナの学校を描く—子供も教職員も楽しく豊かに学べる場をめざして』教育開発研究所.55-61.
- 平井聡一郎（2020）オンライン授業を止めてはいけない理由。「教育研修」編集部編『ポスト・コロナの学校を描く—子供も教職員も楽しく豊かに学べる場をめざして』教育開発研究所.108-116.
- 堀和世（2021）「オンライン授業で大学が変わる～コロナ禍で生まれた「教育」インフレーション」

大空出版

石井英真 (2020) 子供たちの「学びを保障する」とはどういうことか. 「教育研修」編集部編『ポスト・コロナの学校を描く—子供も教職員も楽しく豊かに学べる場をめざして』教育開発研究所.62-70.

北尾倫彦 (2020) 「深い学び」の化学—精緻化、メタ認知、主体的な学び—. (クレイス叢書 01) 図書文化社.

マイケル・B・ホーン、ヘザー・ステイカー (2017) ブレンディッド・ラーニングの衝撃—個別カリキュラム×生徒指導×達成度基準—を実現したアメリカの教育革命. 小松健司訳. 教育開発研究所.

溝上慎一 (2020) 主体性に依存するオンライン学習—教育格差か、それとも個の多様性か. 「教育研修」編集部編『ポスト・コロナの学校を描く—子供も教職員も楽しく豊かに学べる場をめざして』教育開発研究所. 88-97.

文部科学省 (2022年3月22日) 「令和4年度の大学等における学修者本位の授業の実施と新型コロナウイルス感染症への対策の徹底等に係る留意事項について (周知)」 (文部科学省高等教育局高等教育企画課) https://www.mext.go.jp/content/20220318-mxt_kouhou01-000004520_01.pdf

両角亜希子 (2020) 大学経営の今とこれから. 『現代思想 10月号』 Vol.48-14.46-56. 青土社

村上正幸 (2020) コロナ禍における大学でのオンライン授業の実情と課題 『現代思想 10月号』 Vol.48-14.67-74. 青土社

佐藤浩章 (2020) ポスト・コロナ時代の大学教員とFD: コロナが加速させたその変容. 『現代思想 10月号』 Vol.48-14. 75-8. 青土社.

佐藤郁哉・吉見俊哉 (2020) 知が越境し、交流し続けるために: 大学から始める学び方改革・遊び方改革・働き方改革.(討議) 『現代思想 10月号』 Vol.48-14.8-20. 青土社

妹尾昌俊 (2020) コロナ禍での反省を活かした学校の働き方. 「教育研修」編集部編『ポスト・コロナの学校を描く—子供も教職員も楽しく豊かに学べる場をめざして』教育開発研究所.178-185.

白川優治 (2020) 「学費」が可視化した大学の構造的課題. 『現代思想 10月号』 Vol.48-14.35-45. 青土社

梅田礼子(2021) オンライン授業実践報告とポスト・コロナの教育改革についての考察. 和歌山大学クロスカル教育機構研究紀要第2巻.152-173.